

第258回 今月読んだ本
福本和夫 思想の再解釈
—「福本イズム」から「日本ルネッサンス史論」へ（11）

第5章 初期三部作を読む—「福本イズム」の誕生(続々)

3 組織論としての「分離結合論」 —『無産階級の方向転換』（1926年）

初期三部作によって福本イズムは誕生する。初期思想全般を福本イズムと呼ぶべきだが、福本イズム=分離結合論のイメージが強い。広義と狭義の福本イズムが存在するのである。本章は「広義の福本イズム」全般を、本節は「狭義の福本イズム」を論じていることになる。

第1・2節と同様に序文と目次内容を載せよう。福本は分離結合論を高らかに宣言する。

序文

1. 我が無産者階級は、いま、
いかなる発展段階を過程しつつあるか?
我々は、これをいかに戦いとるべきか?
2. 我が無産者階級は、その運動の方向を、いま、
組合主義的闘争より社会主義的政治闘争へ転換しつつある。
我々は、「結合する前に、まず一旦きれいに分離すべきである。」
3. 故に、我々はいまや、大衆化しなければならぬ。だが、同時に、一切の日和見主義者、就中、いわゆるトレードユニオニストー組合主義者に対する正確・果敢なる批判一闘争一克服をゆるがせにしてはならない。
かかる戦術の闘争によってのみ、我々は、真実に無産階級的な運動へ転換し、そしてかかる運動のための組織を創設しうるに至るであろう。
4. 我々は、「歴史の分野において、ここに現在の分野のうちに経過しつつある。そして、いくらか将来の分野へ移りつつある。」だが、我々は確信する。この次の時期において、戦闘的マルキシズムの昂揚結晶、浸透展開は、将来せらるるであろう。「機会主義者の後衛は、ヨリ革命的な階級の前衛によって、おき替えらるるであろう。」
5. 私は近く、さらに立ち入って、
組合主義的闘争と社会主義的闘争との本質並に差異をあきら

かにし、また、方向転換の提唱者たる山川均氏の方向転換論を、部分的にはすでに論評したのであるが、さらに改めて、詳細にて検討したいとおもう。

そして、それらが、本書の第2分冊の主要内容を形成するであろう。（『福本和夫初期著作集 第3巻』復刻自註版、こぶし書房、1972年、67-68頁）

第1分冊は山口高等商業学校在任中の1925年に執筆された論文から成る。第2分冊は政治活動に参加して以降の論文集であり、具体的な論敵に対する反駁論になっている。

『初期著作集 第3巻』では第2分冊として扱われた「折衷主義の批判—山川氏の方向転換論の批判」（1926年4月19日稿了）、「所謂経済行動と政治行動」（同年4月24日稿了）、「経験的現実主義の正体と其の行方」（同年9月1日稿了）、「我々は今や理論的闘争に政治的曝露を重ね始めなければならぬ」（同年10月14日稿了）、「全無産階級のための新聞一併せて、青野氏の無産階級新聞論を駁す」（同年7月16日稿了）は、北条一雄名義の『理論闘争』（白揚社、同年11月）に所収されている。ここでは1926年4月に刊行された第1分冊の目次を見ていこう。

なお、第IV章で登場する「河野密氏」とは東京帝大法学部在学中に新人会に入り、卒業後、右派の社会民主主義でも左派のマルクス主義でもない中間派の立場で日本労農党（1926-1928）、社会大衆党（1932-1940）、戦後は社会党に参加して衆議院議員を12期務めた政治家（1897-1980）である。河野は論客として知られた人物ではない。福本は雑誌『マルクス主義』に掲載された組合主義（トレードユニオニズム）に立脚する河野論文を厳しく批判する。福本は河野の主張を山川イズム（山川理論）の垂流として位置づけており、河野批判はそのまま山川批判であった。

内容目次細目

- I 欧洲における無産者階級政党組織問題の歴史的考察
 - 一 党づくり（党組織論）の方法論的研究
 - 一 無産者階級の歴史的使命
 - 1 有産者団と無産者団 2 直接性に於ける有産者階級と無産者階級—其の媒介性への過渡の根拠 3 媒介性に於ける無産者階級 (a) 無産者階級の社会的、歴史的、特殊地位 (b) 無産者階級認識の特性 (c) 無産者階級の使命実現の可能性 4 無産者運動とマルクス主義
 - 二 「理論」と「実行」との弁証法的統一

1 「理論」と大衆 2 「実行」—社会の現実性 3 従来の哲学と史的唯物論

三 無産者階級の組織過程

A 組織過程に於ける無産者団

- 1 「理論」と「実行」との媒介形態としての組織過程
- 2 組織過程に於ける無産者団 3 無産者団の階級意識過程 (階級形成過程) 4 中間層 (プチ・ブルジョア、農民) 5 無産者階級 6 中間層に対する態度— (機会主義とマルクス主義)

B 無産者階級組織の形態、機能並に其の交互作用

- 1 無産者階級の階級闘争状態 (階級形成過程) 2 マルクス主義的政党と他の無産者政党 3 労働組合—政党と組合との関係—革命と労働組合機能の転換

四 マルクス主義的政党発達の史的段階

A 概説

B レーニン=ローザ論戦

- 1 論戦の序説 2 レーニンの政党組織論 3 ローザの政党論 4 レーニン、ローザの主要対立 (a) 「意見の相違」—ローザ (b) 「組織問題」—レーニン 5 ローザの誤謬の理論的根拠、其の誤謬の訂正

五 マルクス主義的政党の組織的特質並にその戦術的作用

- 1 組織的原則 2 組織と戦術との弁証法的統一 3 左翼的理論拘泥主義の克服

II 『方向転換』はいかなる諸過程をとるか

我々はいまそれのいかなる諸過程を過程しつつあるか

一 問題

二 この問題理解の我国に於ける特殊の困難さ

三 我が「方向転換」の必然に過程すべき諸過程

四 我々は、いま、それのいかなる諸過程を過程しつつあるか

III 労農政党と労働組合

一 「方向転換」過程

二 この発展過程に於ける我が無産者階級の歴史的社會的地位

三 何を戦いとるべきか?—闘争目的

四 労農政党と労働組合

IV 河野密氏の『方向転換と政治行動』

一 序論 (一) 論議の交渉 (二) 氏の三論文 (三) 論戦の必要

二 氏の方法論 (一) 粗雑なる経験主義—俗学主義 (二) 非全体性観察 (三) 排他性、対立的に硬化したる觀念
(四) ^{アンライノミニ}_{二律背反と當為} (五) 史的類推主義 (六) 闘争する前に闘争せんと欲す

三 方向転換と政治行動 (一) 方向転換期 (二) 「政治行動内の一より他への転換」 (三) 「労働政党と組合との関係」 (四) 「総同盟の分裂」

四 「結合する前の分離」にたいする氏の批評

(『福本和夫初期著作集 第3巻』復刻自註版、こぶし書房、1972年、69-72頁)

第Ⅰ章「欧洲における無産者階級政党組織問題の歴史的考察」は福本が3番目に発表した論文(第1論文は前節で言及した「経済学批判のうちにおける『資本論』の範囲を論ず」、第2論文は「河上博士の『唯物史観と因果関係』について」)で脱稿日は1925年2月10日となっている。留学を半年延ばして草稿を準備した「大いに力を入れた労作として、思い出の深いものである。」(前掲6-7頁、「はじめに」1971年)

すくなくとも、日本の左翼陣営では、おそらく、これが本来のマルクス主義の方法論によっての、党组织論展開の最初の試みであった。そして、共産主義運動の弾圧を目指した惡法—治安維持法のすでに制定・公布されていた政治情勢のもとでは、じつに大胆不敵のこころみであった、といえるだろう。

げんに、検閲を考慮して、多くの箇所を伏せ字にして印刷されたにもかかわらず、刊行後すぐに発禁の厄に逢っているのである。

(前掲書「はじめに」5-6頁)

ヨーロッパ留学中、福本は日本の左翼運動の情報に通じていなかつた。まして非合法の日本共産党的動向を知るはずもなかつた。1917年の勝利したロシア革命(レーニン主義)と1919年の敗北したドイツ革命(ローザ・ルクセンブルク主義)の比較検討は、そのまま第1次日本共産党的結党・自発的解党(1922-1924、福本の留学期間と重なる)の批判につながっていく。第2章で言及したレーニン主義、ルクセンブルク主義について、ここでは繰り返さない。

レーニンもローザも「機會主義」(定まった行動原理がなく形勢の有利な方に追従する立場、日向ぼっこ主義と呼ぶ)を批判することに変わりはない。しかし、革命的政党内に発生する方法論、運動論などの「意見の相違」の扱いは異なった。ローザは単な

る「精神的闘争」として片づけて無産者階級の自発的成熟を求めた。それに対してレーニンは「意見の相違」を「政治的戦術的闘争」の場で「組織問題」として扱った。「民主集中制」に基づく異論・分派を許さない「鉄の規律」が革命党には求められる。プロレタリア前衛党が10年以上かけてボルシェビズムの反対勢力を放逐しなかつたならば1917年革命は成し遂げられなかつたであろう。

それゆえに、マルクス主義の任務—機会主義、修正主義、空想主義克服の任務は、決してあやまれる傾向を一度片づけただけですむものではない。マルクス主義は、無産者団の思考の上にはたらく有産者の思考様式のあらゆる形態に対して執拗なる闘争をつづけなければならぬ。
(前掲117頁)

後に自主性、人間性の回復を強調する福本は、ドイツ革命敗北の原因をローザの組織論に見出す。1918年11月、バルト海に面したキール軍港で水兵たちが反乱を起こす。この大衆的蜂起の後で「真に革命的なる政党」はようやく組織される。「しかしそれは、かの独逸革命の機運を真に無産者の革命にまで導き進めるには、あまりに遅かった。」(前掲121頁)

下記の引用は第I章の結論部分である。「ブランキー」とは、武装した少数精銳の秘密結社による権力の奪取と人民武装による独裁を主張したブランキ(1805-1881)を指す。

組織論の弁証法的発達の経路を、今、表式的に要約すれば次の如くである。

- (a) 機会主義者—組織の過重評価。進化論(排他的意義に於ける)、—有機的発達。
 - (b) ブランキー主義者—少数意識者の意識的行為の過重評価。革命論(排他的意義に於ける)。
 - (c) ローザ・ルクセンブルク組織の過小評価(大衆的自発性の過重評価)。革命論(弁証法的意義に於ける)—有機的発達。
 - (d) レーニン—集權的組織(少数意識者と大衆との弁証法的連絡)—政治的戦術的。革命論(弁証法的意義に於ける)—意識的政治的行為。
- (前掲118頁)

第I章(1925年2月10日稿了)でヨーロッパの政党組織問題を論じた福本は、第II章「「方向転換」はいかなる諸過程をとるか
我々はそれのいかなる過程を過程しつつあるか」(同年9月5日稿

了)、第III章「労農政党と労働組合」(同年12月10日稿了)、第IV章「河野密氏の『方向転換と政治行動』」(同年12月31日稿了)で、帰国後の僅か1年余りで学んだ日本の政党組織の問題点を分析・批判する。

第1次共産党の解党、治安維持法、コミニテルンなどの現実政治については次章に譲るとして、方向転換論に的を絞ろう。

福本は第I章でレーニン『何をなすべきか』(1902年)を引用して、レーニン組織論の核心は「階級意識を意識したる無産者団の組織と不可分的に結合したるジャコビン党(ジャコバン派、フランス革命でロベスピエール(1758-1794)らが急進的な革命を推進—岩田注)」の創設によって「結合する前に、先ず、きれいに分離しなければならない」ことであると論じた(前掲110頁)。

福本は「「分離結合論」は専ら党づくりについてのことである」(前掲書「はじめに」56頁)と断定する。論敵は山川であり、分離結合論=(狭義の)福本イズムは山川イズムの否定の上に成り立つ。

山川イズムの代表的論文は「無産階級運動の方向転換」である。この論文は社会主義雑誌『前衛』1922年7・8月合併号に掲載された。1922年1月に山川均らによって創刊された『前衛』は後に第1次日本共産党機関紙の一つとなり1923年3月に14号で終刊して機関誌は『赤旗』に統合される。

「無産階級運動の方向転換」は10頁の短い論文である。福本の難解な文章に比べると山川論文は実にわかりやすくて読みやすい。インテリゲンチャを読者に想定した福本と労働者を想定した山川の違いだろうか。9つの節に分かれれる内容を節ごとにまとめてみよう(『山川均全集 第4巻』勁草書房、1967年、336-345頁、所収)。

第1節「右翼と左翼との見解」

保守主義者も急進主義者も一步一步ずつ歩むほかはない。保守主義者は第1歩を踏みしめることは知っていても第2歩を踏み出すことを忘れている。ちょうど今、第1歩を踏みしめた日本の無産階級運動は第2歩を踏み出さなければならない。

第2節「少数者の運動から」

階級意識は天から降ってくるのでも地から湧いてくるのでもない。無産階級は資本主義に物質的にも精神的にも支配されている。やがて少数の先覚者たちが結束して無産大衆の中に「ちいさいながらも、ぼんやりとした、かたまりになる」(前掲337頁)。その少数の「かたまり」はきわめて徹底した階級意識の上に徹底した行動を取ろうとする戦闘的集団となる。このようにして第1歩を踏みしめた日本の無産階級運動は第2歩を踏みださなければならぬ。

第3節「社会主義運動の第1期」

日本の無産階級運動には2つの方面、すなわち社会主義運動と労働組合運動がある。この2つは表裏一体である。

日本の社会主義運動はごく少数者の運動であり、今まで一度も大衆運動となったことはない。しかし、第1次世界大戦前の各国の社会主義運動と比べても、日本の社会主義運動は思想を徹底化・純化させてきたことを認めなければならない。その代償は大きく、社会主義運動は大衆と離れてしまった。

資本主義の心理と思想に支配された時代に、独立した無産階級の思想と見解を築くには必要な道程であった。日本の社会主義運動の思想には妥協主義、日和見主義、改良主義が混ざったことはない。常に階級闘争主義と革命主義に立脚してきた。資本主義の撤廃という最後の目標のみを見つめてきた。最後の目標を見つめていたために、かえって目標に向かって前進することを忘れていた。

第4節「われわれは誤っていた」

このような潔癖な革命的態度を取るならば「10人か20人のご定連が集まって、革命の翌日を空想して気焰をあげるか、巡査を相手に「革命的」の行動にてて、一晩の検束をうけて大いに「反逆の精神」を満足させるくらいが関の山である。」（前掲339頁）これは虚無主義であって社会主義運動=大衆的運動ではない。

階級意識に目覚めた少数者がいったん大衆から離れて思想を鍛えることは無産階級運動の第1歩である。しかし、この1歩に20年（1900年に社会主義協会設立、1901年に社会民主党を結成、即日結社禁止—岩田注）もかけたことは誤りであった。次の1歩を踏み出すことを忘れる保守主義者の誤謬に陥っていたことは明白である。

第5節「労働組合はどうか」

組合運動も同様である。きわめて少数者の運動、労働者階級の先覚者の運動と言わざるを得ない。100年、150年の歴史を有す外国の労働運動と比べても、思想の徹底化・純化は見劣りしない。組合運動もまた、無産者階級の前衛が現れてみごとに第1歩を踏みしめた。第2歩を踏み出すことを忘れていては社会主義運動と同じ誤謬を繰り返すことになる。

第6節「われわれの新しい標語」

日本の無産階級運動（社会主義運動と労働組合運動）の第2歩のためには、無産階級の大衆を動かすことを学ばなければならぬ。「前衛たる少数者は、本隊たる大衆を、はるかうしろに残して進出した。今や前衛は敵のために本隊から断ち切られる憂いがある。」（前掲342頁）無産階級運動の新しい標語は「大衆の中へ！」である。

第7節「大衆は何を要求しているのか」

無産階級運動は第2期に入った。無産階級の大衆が何を要求しているかを的確に見なければならない。最終目標は資本主義の撤廃である。大衆が目前の生活の改善を要求しているならば、現実の要求を基礎としなければならない。大衆の要求から力を得てこなければならない。これは決して革命主義から改良主義への堕落ではない。大衆の現実の要求を離れていては最後の目標へ向かう大衆運動は成立しない。「無産階級の大衆の当面の利害を代表する運動、当面の生活を改善する運動、部分的の勝利を目的とする運動」（前掲343頁）を最重要視して運動を実際化しなければならない。

第8節「政治の否定と政治的抵抗」

大衆の利害、生活改善に目を向けるにはブルジョア政治を無視してはならない。個々の予算配分は生活に直結する。例えば、海軍軍縮で生じた剰余金が無産階級の具体的な経済生活を向上させるかは大きな関心事である。

無産階級の運動はブルジョア政治を否定すればよい、不潔な虫は殺せばよい。ブルジョア政治を消極的に否定し続けていくと、結果的にはブルジョア政治を肯定し支えしまうことになる。「ブルジョア政治と闘わぬ者は、ブルジョアの政治を援けている者である。」（前掲344頁）

第9節「全線の方向転換」

われわれの第1歩は思想を徹底化・純化することであった。われわれは思想的に革命主義者となった。大衆の実際の要求に触れて共に動くとき、革命主義の思想が革命主義の運動となる。そのためには「あれもつまらぬ、これもつまらぬ」という消極的、回避的、懐疑的、虚無主義的の態度を棄てて、積極的、戦闘的、実務的となねばならぬ。……たんに否定の態度から積極的闘争の態度に移らねばならぬ。」（前掲345頁）

これが日本の無産階級運動の全線にわたって行われなければならない第2歩、すなわち「方向転換」である。「大衆の中へ！」革命主義を改良主義、日和見主義への堕落から守らなければならない。

以上が「無産階級運動の方向転換」の概要である。発表時の山川は42歳であり、すでに20年以上の豊富な活動経験があった。平易でしかも内容が濃い名文は、大衆運動家をじっくりと教え諭すかのようである。社会主義運動や労働組合運動の現場に一度も立ち会ったことのない福本の硬い文章とは異なり、主張がストレートに伝わってくる。

山川は、大衆から切り離された少数者の前衛党（非合法）ではなく広範な勢力を結集した合法的な無産階級政党、共同戦線政党を組織することを訴えかけた。後に山川らの非日本共産党系マルクス主義者は1927年に創刊された雑誌『労農』のタイトルから「労農

派」と呼ばれるようになり、日本共産党系の「講座派」と対抗するようになる。

福本は山川イズムを批判する。山川論文と『無産階級の方向転換』をじっくり読むと両者の考え方の大筋はかけ離れていないことがわかる。山川イズム＝ルクセンブルク主義と福本イズム＝レーニン主義の違いはどこにあるのか。

山川も福本も社会主義運動には2段階があることを認めている。第1段階で少数者の前衛が階級意識を鍛え上げ、第2段階で前衛党が大衆に革命意識を注入する。資本主義が未発達なロシアでは前衛が大衆を指導したレーニン主義が勝利をおさめ、資本主義が浸透したドイツでは階級意識の自発的醸成を想定したルクセンブルク主義は敗北した。

山川は第1段階に20年もかけたのは失敗であり、ただちに第2段階に進まなければならぬと総括する。福本は、これから第1段階が始まる、先ずは分離結合＝外部注入論を理論闘争の場面に限つて展開すべきである、と主張する。第Ⅱ章第4節「我々は、いま、そのいかなる諸過程を過程しつつあるか」において、この問題を「無産者結合に関するマルクス的原理」と名づけるのである。

マルクス主義＝マルキシストを、いかし、深め、浸透せしめるがためには、諸主義－諸要素との間の結合は、いかなる原理に従うべきかの問題である。

マルクス主義の理論と経験とは答えていう－一旦自らを強く結合するために、「結合する前に先ず、きれいに分離しなければならない。」……と。

「単なる意見の相違」－同一傾向内の一と見えたところのものを「組織問題」に迄、従つて単に「精神的に闘争する」に止まりしものを、「政治的、戦術的闘争」にまで開展しなければならない。（中略）

我々は……今や、始めて、結合－全国的大政党樹立の必然に当面している。この形勢が2段の決定を導く。

第1に－それにも拘わらず、否、それだから、我々は、先ずマルクス的要素を「分離」し、結合しなければならぬ。

第2に－この原則を戦いとするがための闘争は当分理論的闘争の範囲に制限せられざるをえぬであろう。

（前掲『福本和夫初期著作集 第3巻』149－150頁）

栗木安延によると、福本の分離結合論も山川の方向転換論もレーニンの組織論であるという（「福本和夫のドイツ留学と日本マルクス主義」、前掲『福本和夫の思想』所収、271－274頁）。前者は19

02年の「何をなすべきか」に、後者は1921年7月に開催されたコミニテルン第3回大会の「戦術テーゼ」と同大会最終日の「ドイツ、ポーランド、チェコスロバキア、ハンガリア、イタリア代表団員会議」でのレーニン演説（「大衆へ」）に依拠している。この演説は「1923年3月行動」（ドイツ共産党とその他の極左組織によってザクセン州で起こった共産主義者の蜂起、敗北に終わったことでワイマール共和国の共産主義勢力は衰退した）を受けてのものであった。各国共産党の大衆化こそが喫緊の課題である。レーニンは、「遠くへ飛ぶに後退しなければならぬ」、「方向転換」して「日和見主義」にさえなれ、と強調した。

ヨーロッパの最新のマルクス主義を学んで帰国した福本にとって、日本のマルクス主義は理論的に磨き上げる必要があった。日本の社会主義運動を牽引してきた山川には、このまま理論闘争を続けているといつまでたっても実際の大衆運動を起こすことができない、という焦りがあった。一方が正しくて他方が間違っているわけではない。福本イズムと山川イズムは相補う主張である。

『社会の構成並に変革の過程』における全体性・過程性、『経済学批判の方法論』が提起した「プラン問題」、『無産階級の方向転換』における組織論・運動論、すなわち「広義の福本イズム」は弁証法の観点から哲学的実践的にさらに深化が可能な問題系であった。全体性的社会認識を通して高められた社会主義的闘争意識が現実の行動、方向転換の原動力になるという理論は誤ってはいない。コミニテルンの「官製マルクス主義」ではない「日本のマルクス主義」が誕生しつつあった。

豊かな可能性を有する福本イズムは実践的スローガンとして矮小化される。外部（前衛）のインテリゲンチャが革命運動を担うプロレタリアートに正しい階級意識を注入するという一方通行の図式が固定化される。教条主義化＝権威主義化した「狭義の福本イズム」の政治的失墜によって、それまでは福本イズムを支持していた者たちも福本イズム＝セクト主義であると一斉に批判するようになる。

留学中のヨーロッパの現実政治から直接学んだ第I章の鋭利な分析に比べ、日本の現実を学ぶ時間が圧倒的に足りなかつた中で執筆された第II・III・IV章の山川イズム批判では地に足が着いていない上空飛翔的な議論が続く。福本自身が日本の現状に関する知識の不足を自覚しており、京都帝大大学院で時間をかけて学び直そうとしていたこと（文部省に許可されなかつたこと）は第2章で触れたとおりである。

ところで、福本は「はじめに」（1971年）で、第II章「方向転換はいかなる諸過程をとるか」における日本経済の現状分析について

て「言い訳」をする。福本が自身の理論的考察に対して弁解することはない。きわめて異例である。

「我が無産者階級運動の「方向転換」は、世界資本主義の一従つて、また相遅れて発達しつつも、しかも、それとその没落を合流する我が資本主義の一没落期に於て行われつつある」（前掲『福本和夫初期著作集 第3巻』134頁）。日本資本主義は世界資本主義の没落に合流しつつある、とは何ともまわりくどい表現である。後に講座派（反福本イズム）を牽引する野呂栄太郎が「日本資本主義激烈没落論」は福本の創案であると批判した。これは事実に反する、というのが福本の言い分である。

福本が政治的活動に参加する前、コミニスト・グループは激烈没落論で一貫していた。コミニスト・グループに加入しようとを考えている者が加入前に重要な既定方針・見解に反対すれば、異端者として最初から排除されてしまうだろう。激烈没落論は誤りであると分析する福本は、没落期に入っていない日本資本主義もやがて世界資本主義の没落期に合流する、と玉虫色の表現を用いざるを得なかつた。

私としては、グループの確定見解であった激烈没落論に対する私の反対見解を、どううまくいいあらわしたら、グループの逆鱗に触れないで、しかも、漸次、これを是正してゆけるであろうか、と苦心さんたんの結果のくるしい表現であった。世界資本主義の没落といわないで、「没落期」と引きのばし、それに「合流せしめらる」としたところに、注意されたい。これがもとで、「合流」という言葉が、当時ムヤミに用いられ出して、一種の流行語となつたくらいであった。

（前掲20頁）

独立独歩の生涯を貫いた思想家の「忖度」には違和感がある。失脚の直接の原因となり人生を狂わせた「27テーゼ」（後述）を評価するは々非々主義こそがふさわしい。

とはいへ、このような合流主義も、じつはまったく中途半端な不徹底なものであった。のちに、27年は、日本の資本主義はなお、上昇期にある、あるいは、上向線を辿っている、と規定した（「日本資本主義は、イギリスおよびヨーロッパ資本主義の諸国とは反対に、疑いもなく、今日なお発展の上向線上にある」—岩田注）が、これはテーゼの方が正しかったこと、たしかである。

（前掲21頁）

自分の身を安全な場所に置いて直接関わることをせず、高みの

見物によってドロドロした政治の世界をあれこれと論評するのは実にたやすい。留学から帰国する直前、前田寛治に「来た、見た、知った、サア戻ろう、戻って戦おう」という言葉を贈った福本にとって「来た、見た、知った、サア戻ろう」の段階は初期三部作の刊行で終わった。理論と実践の弁証法的統一は次の「戻って戦おう」のステージで実現しなければならない。

いよいよ福本は「火炎政治」（清水多吉の造語）の舞台に飛び込むのである。